

柴田翔「されどわれらが日々——」における〈純潔〉の問題

——単行本のベストセラー化に注目して——

富 中 佑 輔

はじめに

一九六〇年代半ばに至り、戦後教育によって育った女子学生が結婚、あるいは就職することによって社会人となった姿を描いていると出版当時捉えられたのが、本論で扱う「されど われらが日々——」という作品である。文芸評論家の松原新一は、一九六〇年代の柴田翔作品に通底するテーマに関して、以下のように指摘している。

柴田翔が検証しようとしているのは、潔癖・無垢・純粹でありえた青春の生の崩壊したあとにひろがらざるをえない荒廃の相といったものである。青春を支えていた「観念」が崩れ落ちてしまえば、あとはただ日常化され習慣化された生をただむなしく受け容れていくしかないその貧しさといいかえてもよい。青春の未熟からどうして人は一挙に荒廃へとすべりおちてしまうのだろうか。なぜ成熟への道が用意されぬのだろうか。(1)

「潔癖・無垢・純粹」な価値観を抱えて生きる「青春」という「成熟への道」が、「崩壊し」、「崩れ落ち」た後の若者た

ちの人生の在り方を、柴田が「検証しようとしている」と松原は分析する。「青春の未熟」、すなわち「潔癖・無垢・純粹」な価値観を内面化して社会人へと「成熟」する道が、いったいなぜ「用意されぬのだろうか」という松原の問い掛けは、些か奇妙である。

「用意されぬ」という表現からは、「潔癖・無垢・純粹」な価値観を基盤とする社会が「用意」され得たにもかかわらず、実現されることがなかったこの社会に対する絶望とも疑問ともつかない切実な思いが窺われる。旧態依然とした社会を再生産するだけの「日常化され習慣化された生」こそが、「潔癖・無垢・純粹」な価値基準によって社会を編成することが不可能となった「荒廃」を生み出したのである。「そこには「観念」の充足などではなく、逆に「精神的無慙さ」しかありはしなかったのである」が⁽²⁾、松原のこうした指摘は如何なる思想的な背景に基づくものだったのか。

この解説は柴田の「贈る言葉」(初出は『新潮』一九六六年四月号)に対するものだが、そこには、本論で扱う「されどわれらが日々——」を考える際にも、有効な視点が示されている。複数の登場人物の行動原理を規定している「潔癖・無垢・純粹」Ⅱ〈純潔〉精神を求める意識に注目することは、本作を分析する際にも有効である。

従来本作品は、様々な立場の登場人物による語りを、ひとつのテキストとして統合する役割を与えられた主人公・橋本文夫の語りに、読者が共感を仮構する形で受容されてきた。だが、六〇年安保闘争から七〇年安保闘争へと政治の季節を通じて、「挫折していく主人公を作者に重ね」て受容された本作の読まれ方において、柴田は「事実上の誤読」が生じていたと本音を吐露している⁽³⁾。

本論では、松原の指摘した〈純潔〉的価値観の思想的な背景を踏まえながら、作者自身が指摘した「誤読」が如何なるものであり、その「誤読」が如何なる要因・状況によりもたらされたのかを探っていく。そのために、差し当たって「されどわれらが日々——」を、一九五〇年代後半に大学に在学した、一九三〇年代半ば生まれであった作中の女性に注目して読んでみたい。梶井優子の物語として、あるいは佐伯節子の物語として。

一 「誤読」された「われら」

石田巧は、本作の「背後には、高度経済成長期における虚無感や喪失感の捏造という問題が控えている」と指摘している⁴。石田は、柴田翔による「ばくの本では五〇年代半ばを扱っているのに、本が出たのが一九六四年で六〇年安保と結びつけられて読まれた。事実上の誤読なんです」という証言、および「この本のテーマは政治ではなく、人間はどこまで自己決定できるのかということです」との言⁵を手掛かりとして、「この作品を誤読した人々は、共産党の『六全協』に揺れた昭和三〇年前後の学生群像を、無意識のうちに、六〇年安保闘争にはじまる大学紛争に変換し、そうした操作を通じて、「自己決定」の問題を高度成長という祝祭的な時空間に対するささやかな抵抗として再浮上させている」と論じた⁶。

「されど われらが日々——」の執筆は一九六二年であり、初出は同人雑誌『象』七号（象の会、一九六三年）である⁷。これが商業誌である『文學界』一九六四年四月号に転載され、同年上半期の第五一回芥川龍之介賞を受賞した。受賞に際して『文藝春秋』一九六四年九月号に再掲載されたのと前後して、同年八月に文藝春秋社より単行本化された。

まず、本作が『象』という文芸同人誌に発表された作品であり、一九六二、三年に「象の会」の文芸仲間たちに読ませることを第一の目的として執筆されたことを確認しておきたい⁸。それを踏まえれば、同作の一九六四年から一九七〇年代のベストセラー化現象を支えたのが、「昭和三〇年前後の学生群像」を六〇年安保闘争や七〇年安保闘争に参加した学生像に「変換」して受容した読者層による「誤読」によるものだった、という指摘は重要である。ただしこの「誤読」は、柴田が想定した読者による正しい読みによつては解き明かされなかったであろう、同作の一面の真実を暴き出しているように思われる。

「されど われらが日々——」を「誤読」した読者であっても、実際に闘争に参加していた世代であるか否かによつて「誤読」の内実は異なるだろう。綾目広治は、先述した石田の論を受けて「この小説は「安保闘争の敗北者青年達」だけでは

なく、安保闘争以後の、ずっと後の世代の読者にも広く読まれた」ことは確認しながらも⁽⁹⁾、秋山駿による同作評を踏まえつつ、登場人物たちの信念が瓦解したり、自我意識が挫折を経験したりする本作の物語内容は、「やはり安保闘争後の挫折ムードに最も合致した小説であったことには間違いない」と指摘している⁽¹⁰⁾。

ただし、「発売されるや、たちまち十萬部を突破」し、一九九五年には「通算百萬部の売上げを記録した」とされる⁽¹¹⁾「されど われらが日々——」の購読者は、「安保闘争後の挫折ムード」を共有していない者の割合が圧倒的に多かったと思われる。したがって、安保闘争の「挫折ムード」を共有していない世代に広く読まれた要因に注目した方が、物語に潜在する性質を明らかにできるはずである。では、本作の「誤読」を誘発した世代的な相違とはどのようなものであり、その世代的な相違はどのような齟齬を生み出したのであろうか。まず、この点を確認しておきたい。

同作の登場人物たちは、作者である柴田翔とほぼ同じ、一九三五年前後に生まれた世代として描かれている。同世代の学生により結成された「象の会」の仲間に向けて執筆されていることから、登場人物の世代設定は柴田によって想定された読者層でもある。作中において「老いやすい世代なのだ」と「私たちの世代」を位置づけ、文夫の心情を「それは、私たちと同じ時代を生きた人たち全てのものであったのではないだろうか」と語る文夫の「私たちの世代」に向けた語りは、そのまま柴田による同世代読者に向けての語り掛けであったはずである。

だが、一九六四年に『文學界』四月号に転載された際、同作は想定された読者とは異なる、より若い世代にも読まれることになる。その中には、主に以下のふたつの世代が含まれていた。ひとつは、六〇年安保世代（およそ一九三八年生まれ～一九四一年生まれ）。もうひとつは、一九六四年時点での大学生、すなわち一九歳から二二歳ごろの読者と想定できる。これはおよそ一九四二年から一九四五年ごろに生まれた世代である。

前者は、綾目が注目した「安保闘争後の挫折ムード」の中で同作を読んだ世代に当たる。だが、闘争の中で「挫折」を実際に味わったわけではない後者の世代の「誤読」は、彼らのそれとは自ずから異なる次元のものであっただろう。柴田

翔による「七〇年代終りぐらいまでは、若い世代の読者にも、同時代的に読まれてたようです。あの頃のことには知らないが、とても共感できるという意味のお手紙が多かった」という証言^②を手掛かりとして、一九六四年に大学生であった世代の読者による「誤読」に注目してみたい。

二 〈純潔〉教育の方針理念とその転換

一九六四年時点での大学に在学していた、一九四二年から一九四五年ごろに生まれた世代は、一九四七年度より設置された新制小学校で最初に学んだ世代であった。卒業後に新制中学校に進学し、新制高等学校を経、新制大学に進学する。アジア太平洋戦争後、新制学校制度による公教育のすべてを享受したのがこの世代であった。一九五八年前後に、この新制学校制度育ちの最初の世代をメインターゲットとし、半ば人工的に設計されたのが、男女共学空間の経験を前提に、生徒の男女交際を描いた〈ジュニア小説〉という文学ジャンルである。彼女／彼らは、一九五八年時点で一三歳から一六歳であった。中学生、または高等学校に進学したばかりの年齢である。「されど われらが日々——」を「誤読」し、ベストセラー化させたのが、〈ジュニア小説〉を最初に享受したのと同じ世代であった点をまず指摘しておきたい。

これに対して、柴田翔ら「されど われらが日々——」で描かれている一九五五年の時点で大学生であった一九三五年ごろに生まれた世代（一九三三から一九三六年ごろ生まれた世代）は、新制学校制度に移行した一九四七年度に一一歳から一四歳であり、小学校高学年から中学校の段階で正式に新制学校制度へと移行したことになる。故に、両世代はともに男女共学化した初等教育で学んだ世代であり、教育制度的な面では共通した経験のある程度持っていたはずである。ただ、中学校の在学年に両世代で約一〇年間のズレがあることに注意しなければならない。この間に、中学校・高等学校において行われた教育内容が大きく変化しているためである。その代表的なものが、旧文部省（現文部科学省）によって一九

四七年以降に開始された「純潔教育」である。これは一九七〇年代以降「性教育」という呼称で行われた内容の前身である。一九四七年一月六日「純潔教育の実施について」（文部省発社一号）により、「同等の人格として生活し行動する男女の間の正しい道德秩序をうち立てることが、新日本建設の重要な基礎」という観点から、純潔教育の必要性が語られ¹³⁾。同年三月三一日に、教育基本法と学校教育法が制定。教育基本法第五条には、「男女共学」が規定され、一九四七年四月に開始された新制中学校、一九四八年四月に開始された新制高等学校において、男女共学制への移行が行われていく。

柴田翔も受けた、開始当初における〈純潔〉教育の特徴を、小山静子は以下のようにまとめている。

純潔教育には、封建的な男女関係から脱して、いかに民主的で男女平等な関係を構築していくのかという問題意識があり、男女共学を前提とした「健全」な男女交際を通してそれが可能になるという認識が存在していた。（中略）そういう意味では、男女共学と純潔教育とは補完しあうものとして、両者の教育的意義が語られ、男女共学の意義を論じれば論じるほど純潔教育の必要性が主張される、という構造になっていたのである。¹⁴⁾

小学校を卒業した後の、思春期の男子生徒と女子生徒すべてを同じ学校空間において教育するという現行の制度への移行は、日本の歴史において初めての試みであった。特に義務教育期間である中学校教育においては、男女共学化がもたらす影響とそれへの対応を避けて通ることはできない。この点を「補完」する教育内容が、「健全」な男女交際を可能とするための「純潔教育」であった。さらにこの教育は、「封建的な男女関係から脱して、いかに民主的で男女平等な関係を構築していくのかという問題意識」を背負っていた。

そのため「当初、純潔という言葉が、守られなければならない規範としてよりはむしろ、民主的で平等な男女の関係性を象徴するものとして意味づけられていた」と小山は指摘する¹⁵⁾。最初期の「純潔教育」における〈純潔〉とは、戦後期

に夢見られた「民主的で平等な男女の関係性」という理想像の象徴であった。そうした理想像を実現するための〈純潔〉教育では、「節度ある男女交際が目指されていたが、このような男女交際は、男尊女卑から男女平等的な関係性へと転換していくための鍵として位置づけられ」た⁽¹⁶⁾。すなわち「単なる性規範として純潔が存在していたのではなく、「健全」な男女交際には民主的で平等な男女関係という価値が込められていた」のである⁽¹⁷⁾。

男女共学化に伴って導入された〈純潔〉という概念は、「平等な男女の関係性」という「民主的」な新しい国民の在り方を実現する価値観であると期待されていたわけである。故に〈純潔〉には、民主主義社会として再出発した日本社会を、将来にわたって支える価値観となることが期待された⁽¹⁸⁾。

この期待の実現に向けて、一九五〇年一月には解説書である『男女の交際と礼儀』（文部省社会教育審議会純潔教育文科審議会、文部省）が刊行されている。さらに同年十二月発行の同書新版『男女の交際と礼儀 純潔教育シリーズ第4』（印刷局）には、「付録」として文部省社会教育審議会純潔教育文科審議会委員である大塚二郎による『Ⅱ「男女の交際と礼儀」を活用するために』という冊子が付属していた。小山静子はこの冊子を精読し、「大塚は、男女共学や男女交際に深い意味を付与していたのであり、その結果、当然のことであるが、男女交際を否定するのではなく、「正しい」男女交際を希求していく」と解説する⁽¹⁹⁾。

大塚が考える純潔教育とは、純潔であらねばならないという規範形成を積極的に行うものというよりは、男女共学の下で「自由」かつ「健全」な男女交際を推し進めていけば、自ずから純潔を保持することに通じ、性的な逸脱は生じないという考え方に支えられていたといえるだろう。そしてそれこそが、封建的な男女関係を脱し、民主的で男女平等な関係性をもたらすものだったのであり、そこでは「男らしさ」や「女らしさ」が備わった、節度ある男女交際が行われるはずのものであった。⁽²⁰⁾

実際には、「自ずから純潔を保持する」という大塚の見通しは楽観的なものであったし、男女共学が施行されて以後も、「女性こそが「純潔」であらねばならないという規範」⁽²¹⁾は日本社会に保持されていくことになった。だが戦後における最初の「男女共学」には、単に男子生徒と女子生徒が同じ教育制度のもとに学ぶということ以上に、同じ教室で過ごす級友、友人として「自由」かつ「健全」な男女交際により民主的で対等な関係性を構築していくことの意義が、大きく見積もられていたことは間違いない。

しかしながら、この〈純潔〉教育の性質は、一九五二年を境に変化することになる。一九五二年、「中・高生徒の性教育の根本方針（案）」が文部省より発表された。浅井春夫は『時事教育年鑑 1953年版』（時事教育通信社、一九五二年）、二八六頁に掲載された「純潔教育」の項に紹介されている「中・高生徒の性教育の根本方針（案）」の記述を整理し、同案の記述を引用しながら、その特徴が、①「生徒に性に関する知識を与えるというよりは、おう盛な活力、精力（エネルギー）を健全な方向に向けてやるような興味深い経験（スポーツ、広はんなレクリエーション活動等）を与えるようにすること」、②「生徒の生理的成熟、発達には著しい個人差があることから、個別的指導が本体であること」、③「性に関する知識（正しい健全な）を与えることは性教育全体からみるとほんの一部であ」って、「いたずらに新しい知識を与えることは、生徒の好奇心をしげきすることになる」ため積極的に行わないことという三点に集約されると指摘している⁽²²⁾。

小川静子はこの一九五二年の「中・高生徒の性教育の根本方針（案）」の特徴を、次のように評価している。

『男女の交際と礼儀』とは異なり、この基本方針から、どのような男女の関係性を構築していくのかという課題意識を読みとることは困難であり、（中略）総体としていえば、中高生の性的関心をスポーツなどを通してできる限り昇華させ、性知識も与えない、という方向で性教育が考えられており、「問題」行動への対策、性規範意識の形成という性格が濃厚であった。そしてこの延長線上に、1955年3月18日、文部省純潔教育文科審議会による「純潔教育の

普及徹底に関する建議」「純潔教育の進め方（試案）」が出されていくことになる。⁽²⁾

一九五〇年代半ばの「純潔教育」からは、当初明確であった、民主的で平等な男女関係の構築という目的意識が消失している。「自ずから純潔を保持する」という理想主義的な姿勢から、「問題」ある行動は避けられないことを前提として「対策」することが「純潔教育」の目的であるとする現実主義的な姿勢へと変化している。

一九三五年生まれの柴田翔が中学生であった一四歳の一九四九年に「純潔教育基本要項」が出され、一五歳の一九五〇年に、『男女の交際と礼儀』が出版され大塚二郎が理想論的な〈純潔〉教育論を展開していた。しかし一七歳の一九五二年には「中・高生徒の性教育の根本方針（案）」が発表され、〈純潔〉教育および〈純潔〉理念は以後の日本社会にとって実現を期待されていないものと化していったのである。

「されど われらが日々——」の単行本読者であった一九四二年生まれ世代としては、「中・高生徒の性教育の根本方針（案）」が出された一九五二年には一〇歳であり、そのため中高教育で彼女ら／彼らが受講した「純潔教育」は、一九五五年の「純潔教育の進め方（試案）」に依拠した現実主義的なものであった。さらに「問題」行動への対策」と小山が評言した一九五二年以降の「純潔教育」には、次のような管理教育的な発想が内包されていたのである。

その政策の根底には、学校生活内では問題を起こさせない、問題行動の可能性をつくることがあってはならないという管理的発想と意思が貫かれています。裏を返せば、社会人になれば、どのような行動をしようと学校教育は関知せずというスタンスであり、社会的性的自立を展望した性教育政策ではなかったということになります。⁽²⁴⁾

柴田翔らは戦後最初期に理想主義的な〈純潔〉教育を享受した世代であったが、「されど われらが日々——」の単行本

出版時における読者層は、中高生時代を通じて管理教育的な、いわば形骸と化した「純潔教育」しか経験していない世代にあたる。柴田の世代に話を戻せば、この〈純潔〉教育の形骸化は、彼女ら／彼らの高校在学中に始まり、大学生となったころに明白となった。柴田らの世代は、思春期只中の中学生のころには戦後民主主義社会に期待される理想主義的な男女の対等な関係性を学んだが、高校に入学して一年ほど後には、〈純潔〉という理念は実効性を失い、〈純潔〉教育は男女の性に対して形骸化した規範を押し付ける管理教育的なものへと変遷していった。〈純潔〉という理念を失っていった一九五二年以降の「純潔教育」は、旧態依然とした社会を再生産するだけの性的規範を、管理教育によって押し付けるものとなっていたと言えよう。柴田の世代は、思春期から青年期への成長と、戦後〈純潔〉教育の形骸化とが、ちょうど重なった稀有な世代にあたっているのである。

柴田同様、思春期に〈純潔〉理念に触れた経験を持つ一九三九年生まれ世代の松原新一は、本論「はじめに」で示した「解説」の中で、初期柴田作品を以下のように論じている。

柴田翔が描こうとしているのは、むしろ、そのような観念を軸として成り立つ青春の崩壊の苦痛にほかならない。くり返せば、主人公が女子学生との間に求めている性的関係は、たんに性欲という自然の欲望にもとづくというよりは、あくまで「自由な男女の自由な結びつき」という「観念」ないしは「精神」の表現としての性であった。⁽²⁵⁾

松原の述べる「観念」や「精神」としての「自由な男女の自由な結びつき」という表現は、「自由」かつ「健全」な男女交際（大塚二郎）という柴田が学んだ最初期「純潔教育」の理念を彷彿とさせる。「されど われらが日々——」とは、〈純潔〉という理想像の形骸化や喪失についての物語なのではないだろうか。

三 「されど われらが日々——」における〈純潔〉の挫折

本作の「序章」において、東京大学大学院修士課程二年次に在籍し、英文学を専攻する大橋文夫Ⅱ「私」（作者である柴田翔と同年生まれに設定）は、古書店を巡るうちに回想に誘われ、「第一章」から始まる物語を語り始める。川田宇一郎が指摘しているように、「序章」において古書店の「二十円程度の均一本」の棚に並ぶ『育児法』、『避妊法』、『革命と闘争』という三つの書名には、「物語の三大ベクトルがバランスよく選ばれて」いる⁽²⁶⁾。さらに川田は、「序章」において語られる「意識しない快活さ」に注目し、次の指摘を行う。

柴田翔の『されどわれらが日々』の序章に書かれていた、女の子が死んだときの「快活さ、嬉しさ」とは、「私」が古本屋の均一本の中に「古ぼけた翻訳書」を発見し、その後書きに含まれた「意識しない快活さ」を説明するため使われています。

（中略）

つまり柴田翔は、「本を出すこと」と「女の子が死ぬこと」に生じる気持ちよさが同じと考えてます⁽²⁷⁾。しかもこの挿話を、序章に書くのは、当然、『されどわれらが』を出版する柴田自身の「意識しない快活さ」の説明でもある筈です。⁽²⁷⁾

これは、本文「序章」で次のように語られている箇所に対する批評である。

だが、私は別にそういう後書きに客^はをつける積りはないのだ。そのちよつと尊大な言いまわし、日本における文学

観の偏向をいましめる学者らしい重々しい口調の中には、奇妙に子供らしい喜び、生の重大事にかかわっているという興奮からくる、意識しない快活さを感じられた。それは、かつて私の友だちであつた一人の女子学生が自殺した時、彼女の友人の学生たちが、その死を悲しみながら、なお無意識のうちに示していた快活さ、あるいは嬉しさと言つてもよいようなもの、と似ていると思えた。⁽²⁸⁾

語り手である文夫は、「二十円程度の均一本」に紛れていた英文学の翻訳書のあとがきを読みながら、そこに「奇妙に子供らしい喜び」や「意識しない快活さ」を見出す。その感情に、彼は「かつて私の友だちであつた一人の女子学生が自殺した時」の「彼女の友人の学生たちが、その死を悲しみながら、なお無意識のうちに示していた快活さ、あるいは嬉しさと言つてもよいようなもの」を重ねている。川田は、「快活さ」と「嬉しさ」という評言を、「気持ちよさ」という言葉に言い換え、その「気持ちよさ」を「女の子が死ぬ」と「本を出す」ことの共通項であると、文夫だけでなく作者の柴田翔も捉えていたはずだと論じる。だからこそ「この挿話を、序章に書くのは、当然、『されどわれらが』を出版する柴田自身の「意識しない快活さ」の説明でもある筈」なのだと。

川田は、『されど われらが日々——』自体が、「流行小説の宿命として、やがては古本屋の均一本に仲間入りする運命を辿」つたのであり、そうして流行小説として市場に溢れる「物語の中に拡散して消えることがあらかじめプログラミングされた小説であるがゆえに、そのプログラム部分（作者の意図）は、消費を拒む」と解釈する。それは、「女の子を殺す」ことで「自分の書いた小説が物語になる瞬間にこそ、自分が書いた小説と同じ気持ちよさが自分に生まれると告白することからも明かなのだと捉える。川田の主張を言い替えれば、柴田は「本を出す」ことで「女の子を殺す」と同じ「気持ちよさ」を感じることに気づいていたために、出した本が市場に「拡散して消える」よう予めプログラミングすることで、自分が生み出した「女の子が死ぬ」物語がいつしか消費されなくなるよう企図したのだ、ということであろう。

女子学生の死に対する消費を主題としているという指摘は頷けるものの、この見解が正鵠を射ているとは思われない。なぜなら本論第一章で確認したように、本作はベストセラー化どころか、単行本としての出版、すなわち消費システムの中に組み込まれ、流通する（女の子が死ぬ）ことの重みが読者に消費される）ことさえ予測されて書かれてはおらず、川田の述べるような「意図」が予めプログラミングされているような小説ではなかったはずだからである。そもそも、川田が触れている「死んだ」「女の子」とは、「私」こと文夫が大学二年生の頃に交際していた女子学生、梶井優子のことだ。優子の葬式で、「快活さ」を感じていたのは誰だっただろうか。

私が病院についた時には、既に四、五人の友だちが集まっていた。

（中略）

私たちは蒸暑い病院の中庭の日蔭で、優子の両親の上京を待った。みなよくしゃべった。それは、殆ど快活さときえみえた。私は彼らを憎んだ。⁽²⁹⁾

川田の指摘する「女の子が死んだときの「快活さ、嬉しさ」を感じていたのは、文夫ではない。この場面で、文夫は続けて次のように、「友人たち」に感じた「憎しみ」について分析する。

私は、彼らが優子の死を充分悼まなかったことを憎んだのではない。彼らは充分悼んでいた。だが、それにもかかわらず、いや、おそらくは、自分たちが友人である優子の死を悼まぬ訳はないと素直に信じられればこそ、彼らは、自分が今人生の大事とかかわりあっているのだという意識に興奮し、無意識のうちに快活にさえていたのだ。そして私は、彼らのそうした快活さを憎んだ。⁽³⁰⁾

文夫が「憎んだ」のは、優子の死を悼む友人たちが、その死に「興奮し、無意識のうちに快活にさえなっていた」からである。これは川田が指摘している「女の子」の「死」を消費する態度である。では友人たちを「憎む」文夫は、優子の死に際して何を感じたのだろうか。

そして、優子の死を知り、その速達を読み終えた時——不謹慎な言い方は許してもらおう——私の胸は期待でふるえた。私は、私の心が激しい悔恨と自己嫌悪と罪の意識に充たされ、それとの闘いに私の全力が消耗しつくす輝かしい栄光の日々の復活を予感した。私は闘うべく身構えた。私は久し振りに自己の充実を感じた。⁽³⁾

彼は、優子の死に際して、「激しい悔恨と自己嫌悪と罪の意識に充たされ」、それと闘う「輝かしい栄光の日々」の「復活」を予感した。それは文夫にとって「自己の充実」であった。この感情は、「快活」な「友人たち」とは対照的であることに注意したい。

文夫は優子の死によって、かつてはそれが当たり前前に可能であった「激しい悔恨」、「自己嫌悪」、「罪の意識」と闘う「輝かしい栄光の日々」の復活を期待した。彼の想定した「輝かしい栄光の日々」とは、正しい行いや気高い行動を行うことができなかった際の自己の在り方を「悔恨」し、その時の自己を「嫌悪」し、さらに「罪の意識」を持つことで正しく道徳的な、いわば〈純潔〉な自己の実現を指向する日々のことだった。文夫が感じた「充実」とは、〈純潔〉理念を指向する機会を得たことによるものである。

こうした〈読み〉を踏まえた上で、佐伯千秋の〈ジュニア小説〉である「若い樹たち」（一九六四年）の最後の場面から登場人物たちのやりとりを引用してみたい。この場面は、「若い樹たち」の主人公である中学生・笹田美枝が、荒川放水路（現荒川）に身を投げて自殺したあと、美枝の姉・美里と美枝の友人たちが放水路の岸に集い、美枝の死を悼んでいる場面で

ある。

「もう、裏ぎりもやらん。もう、疑うこともやらん。秘密も、持ち合わん。みんな、デコボコ心だ。でも、底はいいやつばかりだと信じ合って、けんかなんかしたって、うまくやれるんだ。」

「ええ、そうよ、そうよ！」

「おれたちに、女の子は、やっぱり必要だよ。女の子にだって、おれたちがいたほうが、いいんだと思うよ。もっと、うまく、やれるはずだったんだ。」

美里の目にも、涙がいつぱいにじんんでいる。

（中略）

「人間ってよ、どうして、最初から、そうできないんだ。気づいていないことなかない。何か、危険みたいなものは感じているのに、かえって、スリルみたいに思ったりするんだ。そのときに、ふみとどまって、そのときに、自分の浮わついた心を、打って打って打ちまくっていたら——」

「ええ、人間って、悲しいものね。でもね、折原くん。今でも、いいのよ。人間は、やっぱり、自分を打つムチを握ることができるとだわ。人間は、いつか、勇気を持つときを知るのよ。あたしは、また、人間を愛していきたいわ。信じていきたいわ。自分の中には、もっと大きな強い勇気を、持ちたいわ」⁽³²⁾

美枝の死を悼む友人たちに、文夫が「憎んだ」ような「快活さ」は見られない。それどころか、「自分の浮わついた心を、打って打って打ちまく」る「自分を打つムチを握る」という自省、あるいは自己抑制を求める志向によって〈女子生徒〉の死を悼んでいる。ここに表われているのは、美枝が死を選ぶような行動しかなかった自己の在り方を「悔恨」し、

その時の自己を「嫌悪」し、さらに「罪の意識」を持つことで、いわば〈純潔〉な自己の実現のために決意を表明する、「されど われらが日々——」において文夫が優子の死を悼む際に求めたような「闘い」を行う青少年少女たちの姿である⁽³³⁾。

「されど われらが日々——」に話を戻せば、優子の死を悼もうとする際に文夫が感じた「輝かしい栄光の日々の復活」という、優子の死を悼むという全力の「闘い」を経ることで至るはずの「充実した栄光の生活」は「なかなかやってこ」ず、文夫は自分が「優子の死を悼みえぬ」ことを感じ、最終的に「自分の空虚さは一時的、状況的なものではなく、自分と空虚は同義であることを知」る⁽³⁴⁾。文夫は「憎んだ」友人らのように死を一方的に意味付けて「快活」に優子を悼むこともできず、かといって「若い樹たち」の青少年少女たちのように、彼女の死に触れて「もっと、うまく、やれるはずだった」と優子と自己との関係や、自己の在り方について思い悩み、「また、人間を愛していきたい」、「信じていきたい」という心情に浸って自省的に悼むこともできなかった。

本論第二章で確認した通り、柴田の世代は、思春期から青年期への成長・成熟過程に、戦後〈純潔〉教育の形骸化が、折り重なるように到来した世代にあたる。文夫による「自分と空虚は同義である」という自己認識への到達過程は、〈純潔〉理念という理想像の力の喪失が「一時的、状況的なもの」だと信じていた文夫が、そうではなく、不可逆的に自らには喪失された価値基準であるということを確認していった過程なのである。

四 挫折した〈純潔〉を取り戻すための旅立ち

綾目広治は、この「優子の死を知り、その速達を読み終えた時——不謹慎な言い方は許してもらおう——私の胸は期待でふるえた」という文夫の感情描写に注目しつつも、「普通なら「期待」云々はありえないことだが、ニヒリズムあるいはニルアドミラリの状態に沈んでいた文夫にとって、情事の相手の自殺はそれらを吹き飛ばすものとなるかも知れないと思

われたわけである」と論じ、文夫の「期待」を、文夫が「憎んだ」はずの「自分が今人生の大事とかかわりあっているのだ」という意識に興奮し、無意識のうちに快活にさえなっていた」という友人たちによる優子の悼み方と、同様のものとして読解している⁽³⁵⁾。

柴田翔と同世代として設定されている語り手・大橋文夫の持つ〈純潔〉理念への志向と、その挫折という展開を正しく読み取ることができない場合、文夫の語りは「ニヒリズムあるいはニルアドミラリ」からの解放と読む外なくなる。だが、そのように読んでしまうと、なぜ文夫は、婚約者であった節子が自分を置いて旅立つことを感動しているのか、判然としないことになる⁽³⁶⁾。

文夫の婚約者であった節子は、「新卒の人たちは、誰も希望しなかったような」「東北のある小さな町のミッションスクール」に、英語教師となるために旅立つ⁽³⁷⁾。その理由を、彼女はうまく説明することができない。ただ文夫に残した手紙には、以下のように書かれている。

が、私は、あなたの持つ何ものかに結びつけるべき何かを、自分自身に持っていたでしょうか。そして、私があなたとの間に望んだ共通のものは、あなたの持つ何ものかに自分の持つ何かを結びつけることによって生まれ出るだろう新しい何ものかだったでしょうか。

(中略)

いつか、私が自分の生活を見出した時、それを告げ知らせたい人は、ただあなただけなのです。(中略)そして、もしそういうことが起きれば、その時こそ、私たちはどんな歓びをもって、互いを見つめ合うことができるでしょう。⁽³⁸⁾

節子は、文夫との結婚生活を捨て、文夫の持つ「何ものか」に「結びつける」べき「自分の持つ何か」＝「自分の生活」

を求めて旅立つ。本論二章で指摘した〈純潔〉教育の、「封建的な男女関係から脱して、いかに民主的で男女平等な関係を構築していくのか」という問題意識」を極限まで突き詰めた先に現れた姿勢であろう。節子は文夫より一歳年下の、一九三六年生まれの女性であると設定されている。九歳で終戦を迎え、一一歳から新制小学校で学んだ。節子もまた、柴田翔と同世代の人物として登場する。節子の手紙には、新制小学校時代を回想する件がある。

あの元氣だった女の子。いつも何かに胸をときめかせ、生きていることが、とても大好きだった女の子。いつも、生きたい、生きたいと、それだけを願っていた女の子。それはもう、今となつては本当だとは思われない位です。あの頃の私は、夏の朝、学校へ急ぐ道でふと頬を吹いてすぎる微風、課外活動で遅くなった秋の夕方、夕日を浴びて立つちよう並木の長い影、正月の張りつめた大氣をふるわせて聞こえる鳥の鳴声、そうしたものにふれるたびに、いつも心が一杯になつて、訳もない歓びに叫び出したくなつてしまふのでした。⁽³⁹⁾

あらためて確認すると、柴田の世代において〈純潔〉教育の形骸化が高校在学中に始まり、大学生となつたころには機能しないことが明白となつた。特に節子は、小学校から戦後民主主義社会に期待される理想主義的な男女の対等な関係性を〈純潔〉教育に学び、実践するための男女共学学級も経験したが、高校時代には〈純潔〉理念は力を失い、それに従つて「純潔教育」では形骸化した男女規範を押し付ける管理教育的なものとなつた。

柴田の世代に属する文夫と節子は、思春期から青年期への成長と戦後〈純潔〉教育の形骸化とが、重なる時代を生きていた。節子が「もう、あれが自分だったとは殆ど信じられない位」「胸をときめかせ、生きていることが、とても大好きだった」「元氣だった」小学生は、成長するに従い、理想像を失い、管理教育的なものへと変貌していく中等教育を目の当たりにしながら、自らもそうした理想を見失つていった。

戦後に確立されるはずであった民主主義社会という理想像は、戦時の抑圧からの解放感からくる、よりよい未来への期待に裏打ちされたものでもあった。柴田は終戦の「解放感」を「子ども心にも強く感じた」体験を告白している。

戦前は、死にたくないと思えば思うほど、頭の上を誰かに押さえつけられている圧迫感をおぼえた。だから昨日まで天皇陛下万歳を叫んでいた教師が、「これから君たちは天皇陛下のためじゃなく、自分のために生きていけばいい」と言った時には、何よりも嬉しかった。

「その点では大江（健三郎）さんと同じです。終戦の解放感を子ども心にも強く感じていましたね」⁴⁰

節子もまた、文夫への手紙において「訳もない飲びに叫び出したくなってしまふ」終戦後の「解放感」について告白している。続けて節子は、「そうした記憶が鮮明に心に甦るのは、それだけ今の生活が貧しい証拠ではないのでしょうか」と現在時点である一九五九年ごろの「貧し」さについて言及する。これは、本論「はじめに」で引用した松原新一による「解説」の批評が指示した「貧しさ」に対応する。

潔癖・無垢・純粋でありえた青春の生の崩壊したあとにひろがらざるをえない荒廃の相といったものであろう。青春を支えていた「観念」が崩れ落ちてしまえば、あとはただ日常化され習慣化された生をただむなしく受け容れていくしかないその貧しさといいかえてもよい。

節子は、子どものころ夢見ていたような文夫との関係性、すなわち「青春の生」を求めて東北のミッシェンスクールへと旅立つ。それは文夫のために食事を作り続け、「自分が死ぬ時、何も思い出すべきものを持たない」という予感を伴っ

た⁽⁴⁾。結婚生活を自らの意思で拒絶し、「崩れ落ちてしまった」〈純潔〉理念、民主的で自由な男女の結びつきによる対等な関係性を、改めて文夫との間に築くために節子は、「自分の生活を見出し」に旅立つのである。この節子の想いに気付いた文夫は、「人は、自分の世代から抜け出ようと試みることさえできるのだから」と感動する⁽⁴²⁾。

私たちはおそらく老いやすい世代なのだが、節子はまだ自らの老いることを拒否している。ことによったら、節子は私たちの世代を抜け出るものかも知れない。⁽⁴³⁾

戦後に夢見られた理想像を実現できない日常に順応し、「老い」ていく文夫の世代にあって、節子は「老いることを拒否し」、教員となる文夫と真に対等な男女関係を築くために、自らも東北地方にある田舎のミッシェンスクールの教壇に立つことを決める。文夫がその節子の想いに心打たれることで、「されど われらが日々——」の物語は閉じられるのであった。

五 「誤読」とベストセラー化

先述した通り、「純潔教育」が「性教育」に言い換えられるようになった一九七〇年代以降、戦後〈純潔〉教育の内実を完全に喪失する⁽⁴⁴⁾。柴田翔は、それでも「七〇年代終りぐらいまでは、若い世代の読者にも、同時代的に読まれてたようです。あの頃のことは知らないが、とても共感できるという意味のお手紙が多かった」と述べ、続けて「それが、八〇年代に入ってガラリと変わった。自己決定なんてどうせできないんだという前提で、昔はそういうことで悩む人がいたんですねと書いてくる手紙に変化した」と証言している⁽⁴⁵⁾。

本論第三章で紹介した佐伯千秋の〈ジュニア小説〉が読者の支持を集めなくなるのも、同様に一九八〇年代に入ってから

のことである。柴田翔の「されど われらが日々——」のベストセラー化現象と、《ジュニア小説》の流行現象の間には、深く通底するものがあつた。

一九六〇年代にあつて、佐伯の《ジュニア小説》は未だ《純潔》理念の実現を訴えるような物語内容を保持している。これは当時の《ジュニア小説》が、《純潔》教育的な理念のタイムカプセル的な役割⁽⁴⁶⁾を果たしていたことを示しているが、そのメッセージが真に読者に響いていたのかは定かではない。悲劇的なメロドラマとして消費的に読まれていた一面があることは否定できない。また《ジュニア小説》である「若い樹たち」と「されど われらが日々——」が、ともに女子生徒・女子学生の悲劇的な自殺を描いていたことは示唆的である。

そもそも、「されど われらが日々——」が、《純潔》をめぐる物語であると気づいて読んだ読者は、ごく少数でしかなかった。たとえば、同世代であり高等教育まで受け、柴田と様々な文脈を共有している「象の会」のメンバーたちくらいだったのではないだろうか。それが一九六四年という《政治の季節》に単行本化され、幅広い読者の手に渡ったため、丈夫の挫折はまず《安保闘争》をめぐる政治的な挫折として「誤読」された。次に、一九五〇年代における《純潔》理念の挫折を経験していない世代によつて、梶井優子や佐伯節子といった女子学生が犠牲となる、生真面目な一種のメロドラマ的恋愛物語として「誤読」された。同時代に人気を博していた《ジュニア小説》と類するような物語として。

一九六四年時点で大学一年次に在学していた文芸評論家の松本健一は、本作について、前述の二つの「誤読」を複合させた形で論を開始している。

ともかく、周囲の友人たちはみなその小説を読んでいた。そして、「甘、い、ね、え……」と感想を言い交わした。

その感想は、この小説がある時期の政治を描きながら、その政治の描きかたが井上光晴のようでも、高橋和巳のようでもなく、いつてみれば一種の《青春物語》として描かれているところからくる印象であつたような気がする。いま、

改めて考えてみると、学生運動をマルクス主義や革命運動といったイメージとの重複において描く——これは野間宏でも高橋和巳でもそうなのだが——伝統から、『されど われらが日々——』がはじめて切れた、ということの意味するのだろう。⁽⁴⁷⁾

「甘いねえ……」とは、本作を恋愛小説的に読んでいることから来る感想とみて間違いない。松本は、本作をあくまでも学生運動を主題とした小説であると定位しながらも、それを「甘い」と評されるような「一種の『青春物語』」として描いている⁽⁴⁸⁾ことが評価に値する点であると論じる。松本は結果的には、「学生運動をそのように使ったこと、いや使いたところ」に、柴田翔の新しさがあったのであり、『されど われらが日々——』はやはり、学生運動を背景にして、正義、忠誠、政治、友情、恋愛、性、そして生の意味を問う『青春』の物語だったのだ⁽⁴⁹⁾と述べることで、結果的に本作の主題化している〈純潔〉テーマにも迫っている。一九四〇年代生まれ世代が丹念に読めば、本作の〈純潔〉の問題に辿り着けた可能性はあったことは示唆されるが、一般的にはやはり「甘いねえ……」と評された『青春物語』としての評価の域に留まっていたと見るべきだろう。

本論では、あまた存在するはずの本作の読者のうち、以下の二種類の読者に注目して論じてきた。①柴田翔が一九六二年から一九六三年に直接想定した同世代（一九三五年前後生まれ）の「象の会」メンバーや関係者。②『文學界』に転載され芥川賞を受賞し、単行本化された時点で手に取った当時の大学生読者（およそ一九四二年生まれ〜一九四五年生まれ）。両者の受講した「純潔教育」は内容が異なっていた。柴田世代では〈純潔〉という言葉が「守られなければならない規範としてよりはむしろ、民主的で平等な男女の関係性を象徴するものとして意味づけられていた」⁽⁴⁹⁾のに対して、一九六四年に大学生であった世代がうけたのは、「学校生活内では問題を起こさせない、問題行動の可能性をつくることがあってはならないという管理的発想と意思が貫かれています」⁽⁵⁰⁾る形骸化した「純潔教育」であった。「されど われらが日々——」は、

後者の読者層により多く読まれベストセラー化したのだった。

おわりに

本論では、《ジュニア小説》を最初に受容した一九四〇年代生まれの世代に注目し、彼女らが、就職や結婚によって社会に出ていく際の苦悩を描いているテキストとして捉えられた柴田翔の「されど われが日々——」単行本のベストセラー化現象に注目した。同作は一九六二年八月ごろに書かれ、一九六三年一月に柴田の大学生時代以来の友人らと結成した「象の会」発行の文芸同人雑誌『象』七号に発表された。『文學界』一九六四年四月号に転載され、芥川龍之介賞を受賞した同作は、単行本化されてから、柴田の想定したものとは異なる世代にも受容されることになった。

一九三六年生まれと設定された節子は、結婚するか否かという人生の岐路に突き当たった際、旧態依然とした日常を再生産していくであろう「貧しい」戦後日本社会に取り込まれることを「拒否」（しようとし）た。「されど われらが日々——」は、戦後に夢見られた理想像を実現できない日常に順応し、「老い」ていく柴田や文夫の世代にあって、節子は「老いることを拒否し」、大学教員となる文夫と真に対等な男女関係を築くために、東北地方にあるミッションスクールに旅立つ。文夫はその節子の想いに気付き、彼女の決断に心打たれるという物語である。この物語は、一九五〇年代を通じて、《純潔》を内面化した男女による対等な関係性によって築かれる新しい民主主義社会という理想像が崩壊していった様を描出し、その崩壊を受け入れて死んだように生きることを「拒否」して旅立つ節子をこそ肯定的に描いている。だが、「拒否」を行動に移す節子の物語は、結局のところ、作家の伝えたいメッセージのために女子生徒・女子学生を犠牲者として表象する《ジュニア小説》に類する悲劇的恋愛の物語として捉えられ、広く『青春物語』として受容されることになる。だがこうした受容によって伝承された《メッセージ》は「誤読」によって成立したものであった。

柴田の目論んだ、〈純潔〉理念の形骸化や崩壊を経験した自分たちの世代の青春を「われらが日々」として描き出す本作は、一九四九年から一九五五年に女子生徒であり、一九五五年から一九五九年まで女子学生であった、戦後期の経験が刻印された節子という女性ジェンダーを、作品の結末部分で物語から退場させることによって幕を下ろす。

この退場を悲劇的であると捉える「誤読」は、些か奇妙である。節子という戦後育ちの女性ジェンダーが、結婚から遠ざかり、自らの理想のために旅立つ物語が、悲劇的なヒロイズムとして読者に受け取られたとするならば、一九六四年における日本社会は、男女共学化と〈純潔〉教育を経験しているにもかかわらず、自由で対等な、民主主義的な男女の関係を求めて旅立つ節子の選択に対して、希望を見出すことができない社会であったことを意味しているのだから。

本作は節子を、一方的に包摂しようとする社会への〈抵抗〉者として描いた。だが、男女共学と〈純潔〉教育を前提として生まれた〈ジュニア小説〉は、女子生徒の悲劇的な死や苦悩を利用することで、戦後夢見られた対等な男女関係構築の必要性を中高生の女性読者に訴えかけようとしていた。元女子学生・節子が自らの理想のために旅立つ物語展開は、〈ジュニア小説〉的な読解コードに則って「誤読」され、その〈抵抗〉が必ずしも読み取られることはなかったのである。

注

(1) 松原新一「解説」『贈る言葉』（新潮文庫、一九七一年五月）、二〇七頁。傍点引用者。

(2) 注(1) 資料、二〇六頁。

(3) 吉原敦子「訪問『時代の本』⑨」『諸君!』一九九五年二月号（文藝春秋）、二五六頁。

(4) 石田巧「モラトリアムとしての〈知性〉 柴田翔『されど われらが日々——』論」『高度成長期クロニクル 日本と中国の文化の変容』（玉川大学出版部、二〇〇七年一〇月）、一九九頁。傍点引用者。

(5) 注(3) 資料、前者が二五六頁、後者が二五九頁よりの引用。

(6) 「六全協」とは、一九五五年七月二七—二九日に東京都渋谷区の共産党本部で開催された日本共産党第6回全国協議会の略称。七月二七日の同会議において、日本共産党は一九五一年の日本共産党第4回全国協議会で決定された武装闘争方針を撤回（自己批判）した。「されど われらが日々——」において登場人物・佐野が参加していた地下活動組織「山村工作隊」もこのときに解体された。以下、『改訂新版世界大百科事典（第6刷）』（平凡社、二〇一四年、デジタル版を「ジャパンナレッジ」にて二〇二二年一月二三日最終閲覧）の「山村工作隊」の項目（執筆・佐々木隆爾）によれば、「講和発効後も日本がアメリカの〈全一的支配（植民地的支配）〉下にあるとし、中国の武装闘争路線をまねた軍事方針が必要だ」という考えのもと、「山村地帯」に〈遊撃隊〉（ゲリラ）拠点を築く目的で組織された。「各地の辺境におもに学生黨員を派遣し」、軍事訓練や武力闘争も行われたが、「地域住民との結合に失敗し成果はなく」、同時期に行われた皇居前広場での血のメーデー事件や交番襲撃、火炎瓶闘争も相俟って「国民の支持を失い」、日本共産党は一九五二年一〇月の第二五回衆議院議員総選挙で大敗したとされる。

(7) 柴田翔「本文庫版のテキストについて」『されど われらが日々——』（文春文庫、一九七四年六月）、二五三頁。

(8) 『象』一号（象の会、一九五九年七月三一日）の奥付によれば、印刷は表現社（東京都板橋区）、創刊時の「編集同人」は東京大学での友人を中心とした稲葉素之、今井美枝子、小田孝、佐藤正英、沢井道子、柴田翔、野崎守英、堀一孝の八名。小田孝「編集後記」（同号一〇一頁、奥付上）によると、「読みかたはゾーでもショーでもキサでもカタチでも自由である。同人内のゾー派は「群盲撫象」の意であると思気込み、カタチ派の主張はカタチあるものを作り出したいという祈りである」という。同「編集後記」には「おのずから、戦前派にも戦後派にもない精神はあると思うし、育つと思う」と記されている。

(9) 綾目広治「柴田翔——『されどわれらが日々——』からの成熟」『国文学攷』一九七号（広島大学国語国文学会、二〇〇八年三月）、二七頁。

(10) 注(9) に同じ。

(11) 注(3) 資料、二五八頁。

(12) 注(3) に同じ。

(13) 小山静子「純潔教育の登場——男女共学と男女交際」『変容する親密圏／公共圏 8 セクシュアリティの戦後史』(京都大学学術出版会、二〇一四年七月)、一七頁。

(14) 注(13) 論文、三〇頁。なお、戦後「純潔教育」の歴史的な経緯を詳細に記載した資料として、松下清美、玉江和義「性教育の現状と課題——性教育の歴史の変遷に着目して——」『宮崎大学教育文化学部紀要芸術・保健体育・家政・技術』二五・二六号(宮崎大学教育文化学部、二〇一二年三月)がある。また一九六〇年代以降の性規範形成を目的化していく「純潔教育」に関する論文として、池谷壽夫「純潔教育に見る家族のセクシュアリティとジェンダー——純潔教育家族像から60年代家族像へ——」『教育学研究』六八巻三号(一般社団法人日本教育学会、二〇〇一年九月)、田代美江子「敗戦後日本における「純潔教育」の展開と変遷」『ジェンダーと教育の歴史』(川島書店、二〇〇三年五月)を挙げることができる。

(15) 注(13) 論文、三三頁。

(16) 注(15) に同じ。

(17) 注(15) に同じ。

(18) 「純潔教育基本要項」(文部省純潔教育委員会、一九四九年一月二八日)では冒頭付言において、「将来の健全にして文化のかわり高い新国家を建設するためには、純潔教育の的確かつ徹底的な普及によって根本的にこれ(引用者注：「男女間の道德の低下、青少年の不良化、性病のまん延」という「家庭や子孫や社会全体に浸透する」「重大な社会問題」を指す)を解決する必要がある」と論じている。なお引用に使用したのは、『文部時報』859(一九四九年四月)を底本とした藤井淑禎「純潔の精神誌——昭和三十年代の青春を読む——」(新潮選書、一九九四年六月)の「巻末資料・純潔教育基本要項」(二二五頁)である。

(19) 注(13) 論文、二三頁。

(20) 注(13) 論文、二四頁。

(21) 注(13) 論文、二八頁。

(22) 浅井春夫「わが国の性教育政策の分岐点と包括的性教育の展望——学習指導要領の問題点と国際スタンダードからの逸脱——」『まなびあい』一一巻(立教大学コミュニティ福祉学会運営委員会事務局、二〇一八年一〇月)、九二頁。

(23) 注(13) 論文、三一頁。

(24) 注(22) に同じ。このような急激な方針転換が行われた時期が、一九五一年九月八日にサンフランシスコ講和会議で講和

条約が調印され、翌一九五二年四月二八日の条約発効とともにGHQが解体、日本の教育行政がGHQの支配下から外れた時期であったことから、〈純潔〉教育と同理念形骸化の理由が窺われる。

(25) 注(1) 解説、二〇五頁。

(26) 川田宇一郎「第六章 柴田翔の消失」『女の子を殺さないために 解説「濃縮還元100パーセントの恋愛小説」』（講談社、二〇二二年三月）、二八六頁～二八七頁。

(27) 注(26) 書籍、二八五～二八六頁。

(28) 柴田翔『されどわれらが日々』（文藝春秋、一九六四年八月）、六頁。

(29) 注(28) 単行本、一四一～一四二頁。

(30) 注(28) 単行本、一四二頁。

(31) 注(28) 単行本、一四二～一四三頁。

(32) 『長編小説 若い樹たち』（小学館『女学生の友』一九六四年六月号別冊付録文庫本）、一二六～一二七頁。

(33) 佐伯千秋の〈ジュニア小説〉が、「されど われらが日々」と同じ一九六四年に、未だ〈純潔〉理念を訴える物語内容を持っていたことは、一九五〇年代半ばに男女共学と〈純潔〉教育の存在を前提として登場した〈ジュニア小説〉が、公教育では形骸化した後も、〈純潔〉教育的な理念、ひいては戦後期の対等な男女関係によって構築される、新しい民主主義社会の実現という戦後期の理想像を、タイムカプセル的に一九六〇年代以降に持ち込んだことが窺われる。

(34) 注(28) 単行本、一四四～一四五頁。

(35) 注(9) 論文、三一頁。

(36) 注(9) 論文、三三頁で、綾目は「節子の〈投企〉についての文夫の反応」には、「首を傾げるところ」だと吐露している。

(37) 注(28) 単行本、二〇八頁。

(38) 注(28) 単行本、二〇六～二一一頁。

(39) 注(28) 単行本、一七五～一七六頁。

(40) 注(3) 資料、二五八頁。

(41) 注(28) 単行本、一一〇頁。

(42) 注(28) 単行本、二一七頁。もちろん柴田は、文夫に二一五頁において「節子のやがて見出すものが、節子の望んだものであるかどうか、それは判らない。節子は優しく純潔だから（後略）」（傍点引用者）、「節子がいくらそれを夢見てくれようとも、節子が再び私のもとに戻ることは望むべくもない」と語らせてもいる。

(43) 注(28) 単行本、二二〇頁。

(44) 『日本大百科全書(ニッポニカ)』(小学館、二〇〇一年、デジタル版を「ジャパンナレッジ」にて二〇二二年一月二三日最終閲覧)の「性教育」の項目(執筆・間宮武、村瀬幸浩)では、「純潔教育」が「性教育」に言い換えられた理由として、一九五八年、一九六九年の学習指導要領改訂によって「学校での性に関する指導内容」が「分散、削除の傾向をたどっていた」ことを挙げている。

(45) 注(3) 資料、二五九頁。一九八〇年代の読者の感想のサンプルとしては、工藤英知(一九六七)「この一冊 Vol.95」[NIBEN Frontier] 二〇一五年五月号(第二東京弁護士会広報委員会)、五二頁を挙げることができる。一九八四年に高校二年生で本作を読んだ工藤英知は、「人生について、自分の存在について、初めて哲学的なことを自覚させられ、考えさせられた小説でした」、「ただ、私は学生時代にこの小説を読んで、「自分とは何か」「人生をどのように生きるべきか」と大上段に構え、大真面目に考え、思い悩んだのです」と感想を述べる。本作を自分の生きている世界とは別の位相に存在するものと感じ、一種のビルドゥングスロマン文学として受容したことが窺われる。たしかに柴田の証言の通り、一九七〇年代以前の同時代的な物語としての受容とは異なる。

(46) 「タイムカプセル」とは、一九三九年のニューヨーク万国博覧会で製作された「キューパロイ(Cupaloy)」や一九七〇年の日本万国博覧会で製作された「タイム・カプセル EXPO'70」のように、現代文明の成果を容器に封じ込めて保存し、世間の時間経過とは隔絶させて、内蔵された文化が失われているであろう開封後の未来世界へと託す機能を果たすものの意。(ジュニア小説)がタイムカプセル的な役割を果たしたという判断については、結果的にそうになっていたということであり、当の(ジュニア小説)作家でさえこの点を理解して執筆していたわけではない点については言うまでもない。

(47) 松本健一「学生運動という青春——柴田翔『されどわれらが日々——』『新潮』一九八八年二月号(新潮社)、一八八頁。

(48) 注(47) 評論、一九〇頁。

(49) 注(15) に同じ。

(50) 注(25) の引用箇所と同じ。